

「歴史的偉業の彩り 日本の子供の目を通して見た1920年のローマ東京間飛行」

写真と文 道原 聡

今から100年前の5月31日、東京の代々木練兵場(現在の代々木公園)に2機のズヴァ式複葉機が着陸した。(グイド・マジエーロとロベルト・マレットは13時15分頃、アルトゥーロ・フェラリンとジーノ・カップパニーニは14時28分頃)それは、当時、世界史上初の1万8千キロを超える飛行の最終航程だった。朝から小雨交じりの天候だったにもかかわらず、20万人にもおよぶ日本人が4人のイタリア人飛行士達を一目見ようと待ち構えていた。それは日本人にとって特別な意味を持つ日であった。その中には、イタリアの複葉機を感動と共に眺め、後に日本初の大型旅客機YS-11を設計することになる木村秀政博士(当時16歳)の姿もあった。その着陸を見た群衆の中には、のちに「日本のゴーギャン」画家田中一村として有名になる当時13歳の田中孝、のちに皇居新宮殿の基本設計を手掛け、ポカンティコヒルズのロックフェラー三世の別荘やニューヨークのジャパンハウスを設計する建築家吉村順三(12歳)、のちに騎馬将校として1936年のベルリンオリンピックに参加し、レニ・リーフェンシュタール監督の映画「オリンピア-美の祭典」に出演することになる稲波弘次(12歳)の姿もあったのかもしれない。日本人が催した彼らを歓迎するための祝賀行事はその後約40日間にも及んだ。イタリア人飛行士たちは日本人から数々のメダルや記念品を贈呈されたが、特に6月3日にはフェラリンとマジエーロは、大正天皇の妃、貞明皇后との謁見を許され、宮中桐の間において、叙勲の御礼を啓上し、貴重な記念品が下賜された。

アルトゥーロ・フェラリンの自伝「世界への飛行」の中に記されている貞明皇后との謁見の場面を、以下に引用してみたい。

『その後、皇后は、私達がローマを出発した日から13歳以下の年齢のすべての学校の生徒にローマ東京間飛行をテーマにして具象画、象徴画、寓意画など、彼らなりの解釈で絵を描くようにという課題を出し、その中から学校で一番優れた作品を集めて2冊のアルバムを作り、そのアルバムをイタリア王妃に贈呈したいので、私達に託すつもりだとお話しされました』

彼が一旦故郷ティエーネ市に帰ったのち、ローマのクイリナーレ宮殿に招待された場面にはこう記されている。

『国王は私をクイリナーレ宮殿に招待してくださいました。親切にも私を勇気づける言葉を惜しみなくかけてくださり、イタリア王冠コメンダトーレ勲章授与式にお立会い下さり、ローマ東京間飛行に関する記録フィルムが一般公開されるに先立って上映会が行われたヴッラ・サヴォイアに招待して下さいました。そこには王妃や皇太子たちもおられました。この機会に私は日本の皇后から託されたアルバム一冊を王妃に献上しました。しかし王妃は、典雅な思召しで、私の旅行の貴重な記念品として私の母に贈呈するようにと下賜されました』

貞明皇后との謁見の場面には2冊のアルバムと書かれているにもかかわらず、フェラリンがローマのイタリア王妃に会う場面では1冊のアルバムと記されている。私にとっては看過できない記述であったが、これをもとに私は2冊のアルバムの調査を始めた。1冊目は2017年1月11日に、昨年お亡くなりになったが、建築家ロベルト・フェラリン氏のお宅に保管されていたことを知り、拝見することが出来た。2冊目は2019年11月26日にヴィーニャ・ディ・ヴァッレのイタリア空軍歴史博物館の記録史料センターで調査することが出来た。

この「記念帖」はサイズがどちらも約34x24cmで、当時日本でよく製本されていたようにアコーディオン形式で開くことが出来るようになっている。

両方ともに、まず東京市小学校教員会員4千人を代表して松下専吉幹事長の1920年6月13日付の肉筆による挨拶文の見開きで始まる。(当時東京の小学校は230校あったようだ)

その要旨は、ローマ東京間飛行を成し遂げたイタリア人パイロット達の勇気と精神は、小学生児童に対する素晴らしい手本になる、というものである。

これらの「記念帖」には7歳から15歳までの男女の児童生徒が制作した、計164点の絵画と書が綴じられている。そしてすべての作品には、児童生徒自身の手で、氏名、年齢、学年、小学校名が記されている。これらの作品は、先の挨拶文によると、20万人の児童生徒から選ばれた作品である。フェラリンの自伝の記述に従うと、「記念帖」は貞明皇后の意向が反映されて作成されたと考えられる品であり、当時の日本人のイタリアに対する尊敬の念や好感が見て取れる。児童生徒たちはこの偉業の意味を十分理解していて、特に飛行士達の苦難や忍耐、勇気や技量について賞賛のまなざしを向けていた。これらの作品を通じて、当時の小学校の教育レベルと児童生徒の高度な美的感覚をうかがい知ることが出来る。先述したように児童生徒の氏名をもとに、彼らとその子孫の方々について調査することが可能である。日伊両国間の歴史と文化交流を知るうえで非常に貴重な史料である。特に、このローマ東京間飛行の3年後の1923年には関東大震災があり、さらに25年後の第二次世界大戦中のアメリカ軍による東京大空襲により、東京の大部分が灰燼に帰ってしまったことを考えるなら、この記念帖がイタリアに残っていることは非常に貴重であると言える。

私は最近東京に滞在した際に、嬉しいことに二人の絵の作者の子孫の方とお会いすることが出来た。騎馬将校稲波弘次氏の息子さんの医師稲波弘彦先生と、建築家吉村順三氏の娘さんであり、音楽学校校長の吉村隆子先生である。お二人とも、この予想もしなかった父親の絵の発見をととても驚き、喜んでくださり、特に稲波弘彦先生は、ぜひ他の子孫の方々にもこれらの絵を見せてあげたいという強い意向をもたれ、現在そのための非営利団体の創立も計画されておられる。

2020年のローマ東京間100周年記念事業が、日本とイタリアの友好関係をさらに強固にするのはもちろんの事ながら、この歴史的な偉業に関する2国間の歴史研究を深めてゆくためのさらなる一歩になるであろう。

©All right reserved

写真キャプション

「記念帖」フェラリンの自伝の記述によると、貞明皇后の意向が反映されて、当時東京の小学校のすべての児童生徒に対して、ローマ東京間飛行をテーマに作品を制作するようにとの課題が出され、その中からすぐれた作品が選ばれたと思われる。

稲波弘次(12歳)の絵。彼はのちに騎馬将校になり、1936年のベルリンオリンピックに参加した。

稲波弘彦氏

建築家吉村順三(12歳)の絵。吉村隆子氏

松下専吉幹事長による大正9年(1920年)6月13日付の記念帖の挨拶前文。

田中孝13歳の絵。彼はのちに「日本のゴーギャン」として知られる有名な画家田中一村になった。